

## 使用上の注意 「はじめに」 (必ずお読みください)

この SIGN FOR CLASSROOM の英語の動画資料について、作成の意図の詳細は、2 ページ以降に示されているので、できるだけ すべてを読んでいただきたい。

### 【要約】

このビデオは、聴覚障がいを持つ生徒たちに英語を教える時、見てわかる会話を表出させることや「書く力を育てる」学習活動に活用できるようにという目的のために作成されたものである。

#### 1 おすすめの見てわかる英語の表現 和洋折衷 案

機能語はアメリカ手指英語(手話単語)で、内容語は手指日本語(手話単語)で、ミックスして表現する。

〈例文1〉 I            went            to school by bus yesterday.

I / 「行く」 + 「過去」 / to / 「学校」 / by / 「バス」 / 「昨日」

〈例文2〉 He goes to the library to read books on Sunday.

「彼」 / 「行く」 + s / to / the / 「図書館」 / to / 「読む」 / 「本」 + s / on / Sunday.

まず文全体を手指英語で表現したこの動画を見て、指導者が担当する生徒の実態に応じて、英語の手話単語を使う部分と日本の手話単語を使う部分を工夫しながら割り当てることで、教室内で見てわかる英語学習活動が実施可能となった。

2 助動詞や代名詞など、アメリカ手話にない単語や区別が難しい単語は、頭文字と動作を調整して、オリジナルを作成した。

3 「三単現の s」、「複数形の s」「過去形」「過去分詞形」など、可能な限り文法事項の習得の状況が確認ができるように、表現の中に組み込んだ。

4 いつでも、どこでもスマホやタブレット、iPad などを取り出して動作確認ができるように、動画のデータは小さくしてある。PC で見するには、小さすぎるきらいがある。

## 1 はじめに

このビデオは、聴覚障がいを持つ生徒たちに英語を教える時、見てわかる会話を表出させることや「書く力を育てる」学習活動に活用できるようにという目的のために作成されたものである。

アメリカ手話 (ASL) は、アメリカの聾者にとって大切な言語であるが、英語とは異なる言語である。そこで、英語の学習には ASL をそのまま取り込むことは、さらに英語とは異なる言語を学習することになり、生徒の学習への負担感増大とつながるとともに、英語を書く力を育てることにはつながらない。

また、日本人生徒の英語学習においては、三単現や複数形の時に「s」はつけているか、あるいは、動詞の単語の過去形や過去分詞の選択は正しくできているかなど、学習事項の定着の様子を指導者は授業の中でも確認することが必要である。そこで、生徒の英語の発話を見てわかるような表現方法が必要であると考えます。

ところで、アメリカでは書く力を育てることに効果的な 手指英語 Signed English (以降 SE と略する) や 厳密手指英語 Signing Exact English (以降 SEE と略する) が導入されているところがある。筑波技術大学の松藤研究室では、SE の単語表現動画を作成し、全国の聴覚特別支援学校をサポートしている。

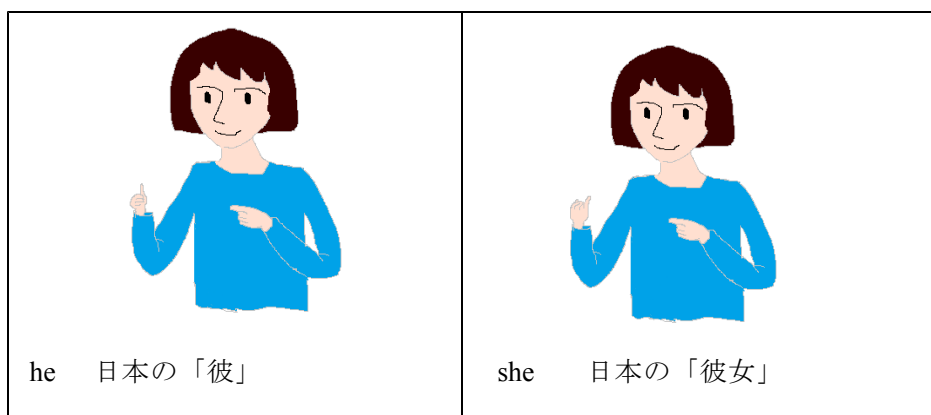
聴覚に障がいのある日本の生徒たちにとって、手話を学び、日本語を学び、英語を学び、アメリカ手話を学ぶことを考えると、相当の負担がある。そこで、ASL よりも、SE や SEE の活用が求められる。しかし、SE では、動詞の活用や助動詞、代名詞等の表現が足りない。SEE では、あまりにも厳密に表現しすぎて、形容詞や副詞等の -ly などすべて表現しており、そのままでは、やはり日本人英語学習者には、大変である。生徒の負担を軽くし、しかし、生徒が何を発言しようとしているのか、発話を見てわかるように表現することで、同じ教室にいる生徒がその発話内容をその場で即共有できるようにする必要がある。

これまで、いくつかの聾学校・聴覚支援学校の英語の授業を見て、音声を日本語の指文字で表しているところが多かった。アルファベット指文字で表現して発表するところもあった。さらには、筆談でという授業もあった。


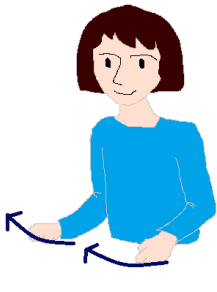
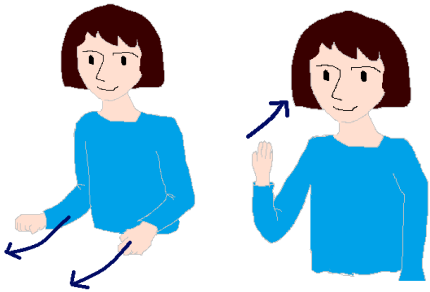
そこで、今回、SE と SEE の中間ぐらいの詳細な表現レベルで、日本の中学生や高校生に必要な文法事項を確認できるような語尾変化をつけた表現方法で、学習すべき文法事項の単文編として動画を収録した。単語編は前述の筑波技術大学の松藤研究室においてすばらしいものを作成されている。今回、英文を動画で表示することで、聴覚特別支援学校・聾学校に新転任して来られた先生方や生徒たちにとって、どのように表現を流していけばよいかの参考資料として提供できたらと思う次第である。実際に授業で活用していて、大変効果的で、学習事項の定着も見られるとともに、会話も学級内で共有できており、書く力も育ってきて、数値的には定期テストや英検等の結果に見て取ることができる。

## 2 ビデオを見るとき の 注意事項






- (1) 基本的に、英単語を手話の単語表現を並べたものである。ASL ではないことを、再度確認したい。
- (2) 日本人学習者向けに、日本の手話単語を取り入れたところがある。  
アメリカ手話にはない「彼」や「彼女」は、日本の手話単語を用いた。



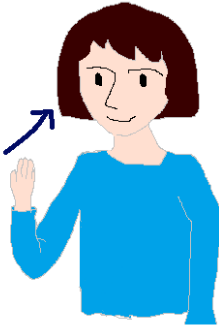
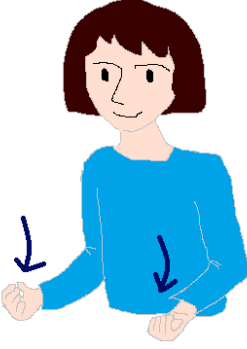
- (3) 「do」「does」「did」は、ASL ではほとんど使用せず、使用してもすべて同じ、SEE では区別が付きにくい表現だったので、「do」は「する」、「does」は「する」を右へ移動(本来の「do」)、「did」は「do」+「過去」として表現を区別した。

do	does	did
 <p>「する」</p>	 <p>「する」を右に イメージ的には日本の 濁音の動き 本来の do</p>	 <p>「する」 + 「過去」</p>

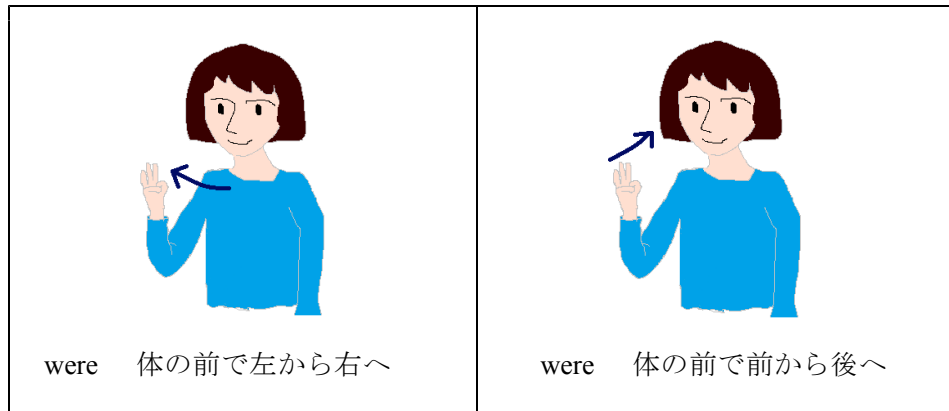
(4) 「can」「may」「have + to」「must」「should」などの助動詞は、ほとんど「can」との違いが出ていないので、「can」を基本形として、「may」は「m」をつくって「can」の動き、「have + to」は、「have」 + 「to」にして、「must」は、意味をつなげて、「m」をつくって「have」の動き、「should」は、「s」をつくって「have」の動きもしくは、「s」をつくって「can」の動きとした。SEEでは、「should」は、「s」を作って、「can」の動きである。

 <p>can cの形で下へ</p>	 <p>may mの形でcanの動き</p>	 <p>have have(持つ) hの形</p>	 <p>must haveの動きで、 mの形</p>	 <p>should haveの動きで、 sの形（原形は canの動き）</p>
---	---	--	--	---

(5) ここでは、「書く力」や文法事項の確認等を意識するために、三単現や複数形に「s」をつけることや過去形には「動詞」+「過去」を、過去分詞には「動詞」+「終わり」の様にあえて活用の部分をつけて表現することにした。

 <p>動詞 + 「過去」</p>	 <p>動詞 + 「終わり」</p>
--	--

(6) be 動詞の過去形は、SE では体の前の横向き(右から左へ)の時間軸を使い、SEE では体の前後(後ろから前へ)の時間軸を使うことが多い。今回のビデオの収録では、横向きの時間軸を使って表現しているが、動詞の過去形に合わせるとしたら、前後の時間軸の方がそろえた方がよいと思われる。機会を見つけて再収録する予定。



(7) 実際の授業では、それでもこの参照動画の様に単語を覚えることは大変なので、機能語 **function words**(前置詞, 代名詞や **yes, no, not, a**,あるいは代名詞、疑問詞)等は、アメリカの表現を用いながらも、内容語 **content words** は、日本の手話表現を織り交ぜながら表現をする(和洋折衷の勧め)。そうすることで、生徒の学習負担は小さくなり、しかも、何を表現しようとしているか、文法的には間違いはないか等を確認することができる。

(例) I went to school by bus yesterday.

I / 行く + 過去 / to/ 学校 / by / バス / 昨日/